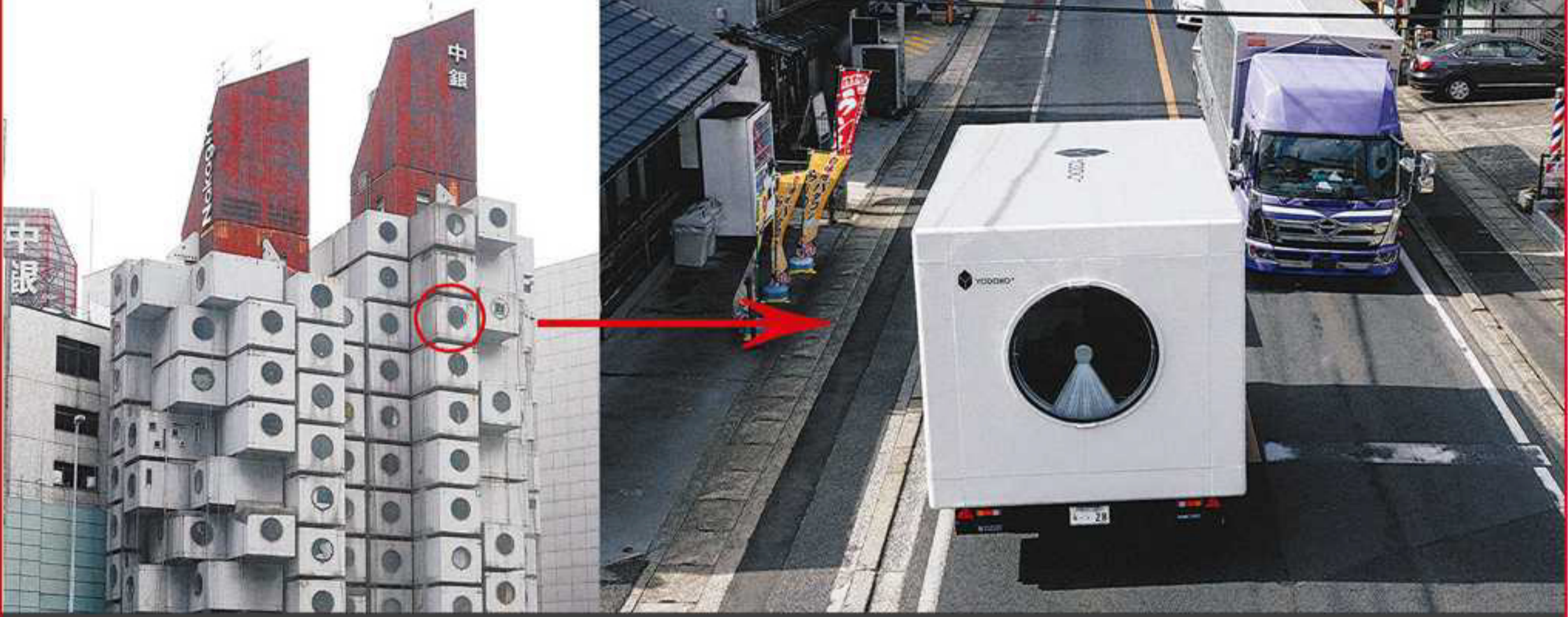


㊦一般道を走る「中銀カプセル」。ナンバプレートがしっかり付いている。幅がバスやトラックよりも大きい＝山田新治郎撮影 ㊧解体前の中銀カプセルタワービル＝2021年9月撮影、中央区で



黒川紀章氏の思想載せ 西へ東へ

走れ！カプセルタワー

銀座にあった名建築 車に再生

銀座8丁目について昨年まで、鳥の巣箱のごとく140個のカプセル(部屋)を積み重ねた風変わりな建物があった。建築家の故黒川紀章氏(1934～2007年)の代表作「中銀カプセルタワービル」。老朽化で解体されたが、カプセルの一つが「車」に生まれ変わった。昭和の名建築は完成から51年の時を経て、各地を巡る足を得た。

円形の窓がある白い箱型のカプセルの下部に、四本の黒いタイヤが付いている。ナンバプレートは車検を通った証しだ。長さ四・一メートル、幅は大型バスよりも大きく二・七メートルある。銀座から三百メートル以上離れた名古屋で十八日に開かれたイベントに、「動く中銀カプセル」が登場した。ここまでトラックにけん引され、高速道路を走ってきたのだ。「動く中銀カプセルは世界に一つだけでしょうね。道走っている姿を見た時には興奮しましたよ」

建築家・デザイナーで工学院大(新宿区)教授の鈴木敏彦さん(六四)は笑った。二十代半ばの駆け出しの時期を黒川氏の事務所でごし、今回カプセルを車にする計画を主導した。ビルは二〇二二年に解体され、有志による「保存・再生プロジェクト」がカプセル百四十個のうち二十三個を取り外した。その一つを譲り受けたのが、「物置のヨドコウ」で知られる淀川製鋼所(大阪市)だ。きっかけは、同社専務執行役員の服部格さん(六四)と鈴木さんとの出会いにあった。昨年「YODOKO+」というブランド名でオフィス家具の販売に乗り出した際、服部さんの目に留まったのが鈴木さんのデザインだった。

都内イベントで実物展示

動く「中銀カプセル」は25～27日に東京ビッグサイト(江東区)である「東京トレーラーハウスショー」で展示。26日には鈴木さんによるセミナーもある。入場無料。31日～6月2日には同じビッグサイトの「R&R建築再生展」で、工学院大のブースに登場。入場料1000円(ウェブサイトで事前登録すれば無料)。

服部さんが東京の鈴木さんの元へ足を運ぶと、意気投合。「ブランドのシンボルとしてカプセルを再生したい」という鈴木さんの思いに賛同し、「先生と十分かけて、社長を説得したんですよ」と振り返る。カプセルを車にしようとした際、ネックは重さだった。内装なしの状態でも二・五トンの内壁のアスベスト(石綿)と鉄骨の一部を取り除き二トンのみ。天井をむき出しにし、ユニットバスの仕切りもなくなった。十平方メートルの空間に備え付けの家具を戻すと、トレーラーの最大積載量二・七トンを下回る二・六七トンを実現した。鈴木さんは「解剖図鑑のように仕上がった」と話す。バスより大きい幅も悩みの種だったが、二三年の道路交通法施行令の改正が追い風となる。車の積

載幅が二・五メートル以下から、この二・二倍に緩和され、公道を自由に走れるようになった。「動くカプセル」にする発想の原点は、黒川氏が一九六九年に打ち出した「ホモ・モーベンス(移動する人)」。カプセルはその住まいと定義された。個人単位のライフスタイルが当たり前となり、新型コロナウイルス禍でテレワークが浸透した今、時代を先取りした思想を、鈴木さんは多くの人に伝えたいという。「五十年で物置は色あせるが、素晴らしいデザインは色あせない」と、服部さんの思いも強い。「実物を見て話をしながら、ものづくり之魂を込める。そんな精神を培っていききたい」

服

部さんが東京の鈴木さんの元へ足を運ぶと、意気投合。



㊨中銀カプセルタワービルをリメイクしたトレーラーハウスでポーズをとる鈴木敏彦さん ㊩展示の様子＝いずれも名古屋市で



文・小川慎一
写真・大橋脩人
佐藤哲紀
紙面構成・宮崎仁美